

西川伸一の オススメシネマ⑧

バイス (米・2018)



アメリカの副大統領 (Vice President) といえば、公選されるが、名誉職的色彩の濃いポストである。しかし、ブッシュ (子) 政権の副大統領を務めたディック・チェイニーは例外だった。この映画はそんな彼の青年期から副大統領期までを描く「まさかの実話!」の作品である。チェイニーには青年時代に飲酒運転と傷害事件で二度の逮捕歴がある。名門イェール大学の

超優等生の恋人リンから、もう一回警察の厄介になったら別れる、自分は母親のように夫からの暴言や暴力に耐え続ける妻にはなりたくない、と強く諭される。リンが嘆く一九六〇年代のアメリカ人女性の境遇は、私が偶然にも少し前に観た映画『ブリーブ』のモチーフだった。さて、さえない青年は政治と出会うことで、水を得た魚のように出世街道を突き進む。妻とな

ったリンも彼を誇りに思うようになる。二人の娘にも恵まれる。ただし、リンの妊娠を理由に彼は兵役を逃れるのだが。そして、共和党のフォード政権では史上最年少の三四歳で大統領首席補佐官になる。しかし、フォードは再選を果たせなかった。チェイニーはホワイトハウスを去り、一九八七年の中間選挙で下院議員に初当選する。その後も当選を続け実力を蓄える。ブ

4.5★公開

ッッシュ (父) 政権では国防長官に就いた。ただブッシュも再選されず、チェイニーは政界を去って、故郷ワイオミングでりと悠々自適の生活を送る。これで終わりのはずはない (終わりなら二一世紀の世界は平和だった) から、大笑いしながらどんでん返しを待つ。すると電話が鳴る。共和党の大統領候補に指名されたブッシュ (子) からだった。「会

うだけだ」とリンに言い残してチェイニーは出かける。予想どおり、ブッシュに副大統領候補を打診される。チェイニーは、断るが候補者探しには協力すると答えた。自分を高く売る時間稼ぎだったのだ。やがて二人は再協議する。そこでチェイニーは、あなたと自分とでは役割が異なる、自分は内政・外交・国防などの分野を担当したいと切

り出す。妻に言われた「大統領が死ぬのを待つだけが仕事」の副大統領にならないためだった。自分の権限をほとんど奪われるこんな屈辱的な条件を、ブッシュはフライドチキンを頬張りながら聞いて、ばかっぱい表情で承諾する。このシーンは最高に笑えた。ブッシュがチェイニーの操り人形になった瞬間だ。

ブッシュ政権となり「9・11」が起きる。おろろする大統領は閣僚間で意見が対立するとチェイニーをすぐるように見る。さらにチェイニーは、フォード政権の補佐官時代に聞きかじった「行政権一元化理論 (Unitary executive theory)」という憲法の途方もない拡大解釈を持ち出す。大統領の命令はすべて合法とする憲法学説だ。これによれば、盗聴でも拷問でも主権国家への攻撃でもすべて合法的行為として免罪される。そして、侵略戦争にほかならないイラク戦争へと突き進むのだ。実はチェイニーは石油関連会社の大株主で、この戦争で同社の株価が五倍に跳ね上がった。彼の大もうけの対価が何十万人もの死である。

ホワイトハウスや米政界上層部で頻繁に飛び交う下品な言葉の数々には呆れた。
(二〇一九年四月八日・TOHOシネマズ新宿)
(にしかわ・しんいち/明治大学教授)